

〔説教〕

「真に第一のこと」

—ピリピ教会への手紙一章二二—一八節—

尾 山 令 仁

〔説教〕 真に第一のこと

三さて兄弟たち。わたしの身に起こったことが、かえって福音の前進に役立ったことを知っていたいただきたい。二三わたしの投獄されていることが、キリストのためであるということは、親衛隊の全員にも、そのほかのすべての人々にも明らかに、二四そして兄弟たちの大部分は、わたしが投獄されていることによって、主にある確信を得、恐れることなく、ますます大胆に、神のことばを語るようになった。二五ある人々は、ねたみや争いからキリストを宣べ伝えるているが、また善意からそうしている人々もいる。二六後者は、愛によってキリストを宣べ伝え、わたしが福音を弁証するために立てられていることを認めているが、二七前者は、純真な動機からではなく、党派によって、キリストを宣べ伝えていて、投獄中のわたしを、さらに苦しめようとしている。二八すると、どういうことになるだろうか。たとい見せかけであろうとも、真実であろうとも、あらゆる方法によって、キリストが宣べ伝えられているのである。だから、わたしは喜んでいゝし、また喜んでいきたい。

パウロは牧会のために多くの手紙を書いています。そのほとんどは彼みずからが伝道し、建てた教会に送ったものです。その手紙の中に、彼は牧会の心遣いを示し、教会が知り、かつわきまをえなければならぬことを、よく教えております。このピリピ教会への手紙も同様であって、彼がこの教会に示したなみなならぬ愛情の深さを、わたしはここに読み取ることが出来ます。

パウロの手紙は、大体その書き方が決まっています。まず最初に、差出人と宛先を述べ、それに続いてすぐに祝福、それから相手の教会のための祈りをしるしています。ところで、ピリピ教会への手紙においては、それに引き続いて、自分の身辺報告をしています。これは彼のほかの手紙には見られないところで、どんなに深くピリピ教会を愛していたかということ、および彼がピリピ教会の兄弟姉妹たちとどんなに親しかったかということを表わしております。そのことは、この短く、しかも獄中からの手紙にしては、珍しいほど多くの「喜び」ということばに出会うことによっても知られます。

彼は、自分の身辺報告をするに当たって、それがきわだったことであるために、「兄弟たち」という親愛の情を示す呼びかけで始めております。「わたしの身に起こったことが、かえって福音の前進に役立ったことを知っていたきたい」と言うのです。「わたしの身に起こったこと」とは何のことでしょうか。それは、次の節で「わたしの投獄されていること」と言いかえていることによつて明らかです。彼の投獄ということは、彼によつて信仰に導かれた人々にとつては、大きな躓きになりかねない事態です。つまり、福音の前進どころか、後退にもなりかねない事態が起こっているというのに、後退どころか、「かえって福音の前進に役立った」というのです。なんと驚くべきことでしょうか。

もちろん、パウロが「投獄されていることが、キリストのためである」ということは「明らかなことなのですが、教会の指導者が、たといキリストのためであるにせよ、投獄されるといふことは、教会員にとつては、大きな打撃です。わたしたちの日本の教会における戦時中の歴史を見れば、そのことはよくわかります。ところがパウロの場合、福音は前進したのです。ですから、これはニュース・バリューのあることでした。しかしパウロは、同じころ獄中から書いたほかの手紙の中には、このことをしるしてはいないで、このピリピ教会への手紙にだけしるしています。「(あなたがたには) 知っていたきたい」と言っているのです。それは、なぜでしょうか。

このピリピの教会は、パウロが第二回伝道旅行で行ったときに出来た教会です。そのとき、パウロは不思議な主の御導きによつて、トロアスから海を越え、ピリピの町へやつて来ました。ピリピの町は、その昔ピリピ戦役のあった古戦場で、その後ローマの退役軍人を中心として出来たローマの植民都市でした。ですから、小ローマとまで呼ばれ、ローマ色が圧倒的に町中を風びしていて、ユダヤ人の数もユダヤ教の力も微々たるもので、ユダヤ教の会堂すらありませんでした。ですから、パウロたちは川沿いにあつた祈り場へ行って伝道し、そこで最初の回心者ルデヤを得たのです。ルデヤと彼女の一家が入信して、まもなく占いの霊につかれた女を、まともな人間にしてやることが契機で、彼女を使って、しこたまもうけていたその主人たちによつて、彼は訴えられ、とうとうむち打ちの刑に処せられ、投獄されてしまいます。そのとき、入信後間もないルデヤとその一家の者たちは大きな試練に会ったわけですが、彼女たちは、まさしく福音の後退にもなりかねないこの事態によく耐え、パウロのために祈り、あらゆる形でパウロの働きを助けたのです。

そのことを、パウロはピリピ教会への手紙の中で、こう述べております。「あなたがたが最初の日から今日にいた

るまで、福音宣教にあずかってきたことを感謝している」(一・五)。ここで「福音宣教にあずかってきたこと」ということばは、「わたしといっしょに恵みにあずかっている人々」(一・七)と言っていることばとは違います^③。ただ「福音(の恵み)にあずかってきた」というのではなく、「福音宣教にあずかってきた」のです。それは、パウロ投獄の試練に耐え、パウロ投獄が福音の前進に役立ったということです。そうした経験を持っているピリピ教会の兄弟姉妹たちにならわかってもらえるという気持がパウロにはあったのです。ですから、彼はこの身辺報告をここにしているわけです。

さて、パウロの投獄が福音の前進に役立ったとは、具体的にどのようなことを指しているのでしょうか。それは、「わたしの投獄されていることが、キリストのためである」ということは、親衛隊の全員にも、そのほかのすべての人にも明らかにあり、そして兄弟たちの大部分は、わたしが投獄されていることによって、主にある確信を得、恐れることなく、ますます大胆に、神のことばを語るようになった」ということです。ほんとうにいい牧会というものは、その牧師のいるときだけ多くの人が集まり、牧師がいなくなると同時に、くもの子を散らすようにいなくなってしまうような教会づくりをするのではなく、むしろその牧師がいなくなっても十分やっつけける信者の養成にあると思います。その点、パウロの働きは成功であったと言えるでしょう。彼が投獄されると、「兄弟たちの大部分は、……主にある確信を得、恐れることなく、ますます大胆に、神のことばを語るようになった」のです。

しかしパウロの身の上には、教会の外から来る迫害ばかりでなく、教会内にも問題があつて、まさしく「内憂外患」も「相いたる」というのが、いつわらざる彼の心境ではなかったでしょうか。その教会内の問題というのが、一五―一七節に示されてあります。ここには二つの派があつたことが述べられています。一つは、「善意から」また「愛によってキリストを宣べ伝え」、パウロが「福音を弁証するために立てられていることを認めている」のに対して、もう一つの派は、「ねたみや争いからキリストを宣べ伝え」、「純真な動機からではなく、党派心によって、キリストを宣べ伝えていて」、投獄中のパウロを、さらに苦しめようとしているのです。前者については、何も問題はありません。問題は後者なのです。

ところで、「ねたみや争いからキリストを宣べ伝え」とか、「純真な動機からではなく、党派心によって、キリストを宣べ伝え」とか、そればかりか、キリストのために投獄されているパウロを、さらに苦しめようとしていると、言うにいたっては、このような人々は、キリスト者ではないとわたしたちは速断しかねないのではないかと思えます。しかしパウロはこの人々もまたキリスト者であることを認めているのです。それでは、どうしてわたしたちは、「これでもキリスト者と言えるか」というような断定を下すのかと言いますと、生活に重点を置いて見ようとすると、向が非常に強いからではないかと思えます。日本人のものの見方は、その人の教えとか理論よりも、その人自体、つまりその人の人格や生活に重点を置きがちであるということです。つまり「あの人は人格的にりっぱだ。だから、あの人の言うことも間違いない」という考え方です。このような精神的土壌に、カリスマ的存在を中心とした新興宗教が生まれてくるのも、またゆえなしとはいいたしません。このような傾向は、ある意味では、押しなべて現代における世界的な傾向であるとも言えます。自分の非力をかこつ現代人は、超能力にあこがれ、それがテレビの中のバットマンとか、スーパーマンとか、ウルトラマンとか、忍者ものシリーズへの期待にとどまらず、現実の自分の生活を変革してくれる者への期待となっていくとき、現代においてカリスマ的超能力を発揮するという人物のもとに多くの人々が群がり集う現象も、うなずけるといえるものなのです。そして現に、異言を語るような集団が、欧米の教会で多くの人々を集めているのも、このためです。

しかし聖書の教えは、決してそうではありません。人格的にりっぱであれば、その人の教えは正しいとは決して教

えておりません。教えは教えであり、人格は人格なのです。ただ正しい教えは正しい人格を生み出していくとは教え
ております。

「ねたみや争い」は、たしかに未信者の特徴です。しかし生まれかわったばかりの信者、つまりキリストにある幼
な子もまた、そのような欠点をまだ持っているのです(第一コリント三・一一三)。ですから、ここでパウロが言ってい
る人々は、たしかにキリスト者ではありませんが、まだよく成長していない人々であることがわかります。「党派心」^④
とは、真理によるのではなく、自分の勢力を大きくすることを目的として分派行動をすることを意味しています。これ
もまた成長していない信者の姿をよく表わしております。しかしキリストのために投獄されているパウロを、さらに
苦しめようとしていると言うにいたっては、どうしてそのようなことがありうるのかと思えないでもありません。そ
れが「党派心」です。つまり、パウロが「福音を弁証するために立てられていることを認め」ないのです。

このような悲しむべきことが教会内に起こっていたとき、パウロはそれに対してどうしたでしょうか。教会の不一
致という重大な出来事に際して、パウロは決してあわててはおりません。彼は、こう言って、それに対処していま
す。「すると、どういうことになるだろうか。たとい見せかけであろうとも、真実であろうとも、あらゆる方法によ
って、キリストが宣べ伝えられているのである。だから、わたしは喜んでゐるし、また喜んでいきたい。」パウロに
対して善意どころか、悪意を抱いている人々に対して、パウロはそれに対抗しようなどとしてはいません。むしろ彼
は「わたしは喜んでゐるし、また喜んでいきたい」と言って、善意を持って立ち向かっております。

悪意を持って相対して来た場合、わたしたちは、その相手に対して、悪意を持って立ち向かってしまうものです。こ
ちらが悪意を持てば、相手はますます悪意を持ってしまう。こうして悪意の悪循環は限りなく続いていきます。
このような悪意の悪循環を断つ道は、善意の先手を打つ以外にはありません。それが、パウロの教えた「善によって

悪に勝つ」(ローマ二・二二)という方法です。そしてパウロは、今ここでその教えを実践しているわけなのです。彼
が「すると、どういうことになるだろうか」と言うことから、「だから、わたしは喜んでゐるし、また喜んでいきたい」
と述べているのは、そのことです。ですから、これは決して彼の負け惜しみや皮肉なのではありません。勝利のこと
ばなのです。

ところで、よく見てみると、パウロは善意の先手を打っているという点だけで、すべてを終わらせているわけ
ではありません。彼はこう言っているのです。「すると、どういうことになるだろうか。たとい見せかけであろうと
も、真実であろうとも、あらゆる方法によって、キリストが宣べ伝えられているのである。だから、わたしは喜んで
ゐるし、また喜んでいきたい。」彼が「喜んでゐる」とか、これからも「喜んでいきたい」と言っている理由は、「キ
リストが宣べ伝えられている」からなのです。

たしかに一方では善意からキリストが宣べ伝えられているのに対して、もう一方では党派心からキリストが宣べ伝
えられてはおりません。しかしキリストが宣べ伝えられていることに変わりはありません。それでは、パウロは、ど
うして「キリストが宣べ伝えられている」という理由で、喜ぶと言っているのでしょうか。

パウロにとって最も重要なことは、福音そのものでした。何が信じられ、何が宣べ伝えられるかということにま
って重要なものは、彼にはなかったのです。そしてその内容がまさしくキリストであるというところに、彼の安心は
あり、彼の喜びがありました。というのは、人が救われるのは、正しい福音であって、人格的にりっぱであるかどう
かではないからです。「ねたみや争い」、「党派心」、および、キリストのゆえに投獄されているパウロを苦しめようと
のよからぬ思いが、たといそこにあったとしても、宣べ伝えられている内容が正しければ、人は必ず救われます。し
かしどんなにりっぱな生活をしている人がいても、そんなことによって、人は救われるではありません。

人が救われるとき、天において、どんなに大きな喜びがあるかということ、今さら申すまでもないことです（ルカ一五・七、一〇）。神が喜んでおられるときに、どうしてわたしたちキリスト者が喜ばずにおれましようか。ですから、パウロは喜んでおられるのです。しかし考えてみますと、決してすなおに喜ぶというような事象ではありませんでした。というのは、投獄中のパウロを、さらに苦しめようとしている人々がいたからです。しかもその人々も、キリストを宣べ伝えている以上、だれかが救われれば、神は喜ばれるのです。ですから、パウロは喜ばずにはいられません。しかしその喜びには個人的には大きな苦しみが伴っているのです。

しかしパウロは決して公私を混同するような人ではありませんでした。個人的には苦しかったのですが、福音に生きるパウロとしては、喜ばずにはいられなかったのです。ここに、彼の信仰による勝利がありました。ですから、この短いことばの中に、彼の血みどろな信仰の戦いの跡を読みとることができ、またそこに彼の信仰の勝利のあとを見ることができるとは、実に、信仰とはこのようなものなのです。

さて、それでは、教会の不一致という問題、ねたみや争い、党派心というような問題は、どうでもいいのか。いいえ、パウロはそれをどうでもいい問題として処してはおりません。この問題は教会における重要な問題です。ですから、あとで彼はこの問題を取り上げておられます。一章二七節から二章の初めにかけては、この問題について述べておられます。そして最後の四章のところでも、わざわざ名前を挙げて、一致するようにと、ふたりの婦人に勧め、またほかの人にもこの問題解決に協力するようにと勧められています（四・二一三）。

しかしパウロは、真に第一のことが何であるかを、よく知っていました。それは、わたしたちが何を信じ、何を宣べ伝えるかという福音の問題です。これこそ、何ものにも優先しなければならない真に第一のことです。

このことが現代において、とかくないがしろにされていることは、まことに悲しむべきことです。すでにいくつもの神学会が存在する中で、わたしたちが日本福音主義神学会を設立したのは、実にこのためです。福音を真に第一のことと考えない学会に対して、福音の内容を厳密にし、聖書信仰に立った真に福音主義の神学会設立の必要を感じ、この学会が設立されたのです。わたしたちは、つねに聖書に立ち帰り、何が真に第一のことであるかということについて、みことばに聞き従いながら、進んでいきたいものです。

注

① 彼の十三の手紙のうち、九の手紙は教会にあてて書いたものですが、そのうちローマ教会への手紙以外は、みな彼か、もしくは彼の弟子（たとえばコロサイ教会への手紙は彼の弟子エパフラス）の伝道によって出来た教会です。ローマ教会は、彼の伝道によって出来た教会ではありませんでしたが、彼の知人がいかにたくさんいたかということは、最後に彼が名あててあいさつを送っていることによってもわかります。ですから、この九の手紙は、いずれも教会という意味をもったものでした。ほかの四つの個人あての手紙も、まったく同じ線にそったものであると言えます。ちなみに、パウロは、このように手紙を送るか、あるいは自ら行くか、さもなければ、自分かわりにだれかを送るかして、牧会しています。

② 手紙の冒頭に自分の身辺報告をしているのは、彼の手紙では、ほかにコリント教会への第二の手紙がありますが、それ以外には見られません。

③ 「福音宣教にあずかっつきた(επιτελεσει)福音(επιτελεσει)福音(επιτελεσει)福音(επιτελεσει)」(epi te koinōnia humōn eis to euaggelion)と「わたしといっしょに恵みにあずかっている人々」(syngkoinōnos mou tes charitos)とは同じ「あずかる」と訳されていますが、その意味は全然違います。その違いは、前者に eis があることです。このことから、前者は、聖書協会の口語訳のように「福音にあずかっている」という意味ではなく、直訳すると「福音への参与」であり、それは、文語訳や新改訳のように「福音を広めることにあずかって来た」という意味です。

④ 「党派心」(ethnē)とは、真理にもとづいて分派をつくるのではなく、自分の勢力を大きくすることを目的として分派行動

